女教師 彩花 二十四歳

第八巻　女教師の水着モデル撮影

海老沢　薫　著

内容

■著作権について
■まえがき
■第一章　女教師の前に現れた新たな小悪魔
■海老沢薫ＢＬＯＧ
■海老沢薫Ｗｅｂ連載小説
※海老沢薫ＢＬＯＧ
・・・最新作の出版情報や、そのほか各種コンテンツ情報などを配信。
https://ebisawakaoru.blog.2nt.com/

■著作権について

「**女教師　彩花二十四歳　第八巻　女教師の水着モデル撮影**」（以下本書と表記する）の著作権は【海老沢薫】にあります。

・本書のすべての内容は、日本の著作権法、及び国際条約によって保護されています。

・「海老沢薫」が事前に書面をもって許可した場合を除き、本書の一部、または全部を、あらゆるデータ蓄積手段（印刷物、電子ファイル、ビデオ、テープレコーダー）により複製、流用、転載、転売することを固く禁じます。

・著作権の侵害につきましては、著作権法第119条などの罰則がありますのでご注意ください。

■まえがき

教師三年目の木元彩花にとって、あまりに衝撃的な事件となった運動会が終わって一週間が過ぎようとしていた。あれから美人女教師は、校内のあらゆる場所で全校生徒や同僚教師達から好奇と侮蔑の入り混じった鋭い眼差しを向けられ、もはや学校中の見世物へと転落してしまっていたのだった。

そんな中、彩花が担任するクラスの委員で彩花の絶対的支配者でもある智子からいつものように屈辱の指令が記された一通のメールが送られてくる。

智子からのメールを読んで思わず絶句する彩花。なんと今度の指令は、顧問を務める女子水泳部の部員達全員の前で自らを貶める驚愕の内容だったのだ。

翌日の放課後、校庭の隅にある屋外プールへジャージ姿で向かう彩花。プールサイドに現れた顧問の女教師を無視する女子部員達に

向かって大学生コーチの栗栖優香が集合の号令を掛ける。

女子水泳部でコーチを務める大学生の栗栖は、彩花が勤務する中学校の卒業生であり、実は今、智子の家庭教師でもあったのだ。そんな智子と繋がっている彼女の計らいによって、智子から与えられたミッションを実行に移していく彩花。

プールサイドで女子部員達およそ三十名に囲まれ、その冷たい視線に晒される中、彩花が身に付けていたジャージを脱ぎ捨てるとプールサイドには部員達の悲鳴が響き渡った。

コーチの栗栖はその様子をスマホで撮影し、離れた場所にいる智子達にライブ配信を始め、美人女教師の屈辱のショーはついに幕を開けたのだった。

■第一章

女教師の前に現れた新たな小悪魔

彩花にとって担任教師として初めて迎えた中学校の運動会は、まさに悪夢の羞恥劇となった。担任をするクラスの生徒達だけでなく、全校生徒やその保護者、そして学園長を含む同僚の教師達にまでその醜態を目撃されてしまったのだ。

まだ教師になって三年目の彩花は、胸に抱いていた教師としての夢や理想を失い、これから教師を続けていく事さえ諦めかけようとしていた。

しかし、彩花はもはや教師という仕事から、そして勤務する中学校から逃げる事は簡単には許されなかった。なぜなら、彩花の弱みを握るクラス委員の智子達は、運動会が終わってからも相変わらず彩花を脅し続け、彩花のプライドを打ち砕く数々の指令を送り続けてきたからだった。

運動会において大勢のギャラリーの前で散々醜態を晒してしまったとはいえ、智子の握る自らの羞恥動画をSNSで世界中に拡散されている事に比べれば、まだましな事のように思えた。それに、自分が今教師を辞める、ある子達に苛められている麻理絵がどうなってしまうか不安で仕方なかった。

そのため、彩花はどれほど恥ずかしくても、これからさらなる生き恥を晒す事になったとしても、せめて麻理絵や智子達が中学を卒業するまでは、このまま今の中学校で皆から白い目で見られながらも屈辱に耐えて教師としていくしかなかったのだ。

運動会が終わり一週間が過ぎようとしていた。彩花は授業中の教室でも、同僚の教師達がいる職員室でも、校内の廊下を歩いている時でも、生徒や同僚教師達の好奇の視線に晒され、服の上から体を透視するかのようなギ

ラギラした眼差しを向けられていた。きっと誰もが運動会の時に目にしっかりと焼き付けた彩花の裸を思い出し、美しい女性教師の痴態を頭の中で勝手に想像しているに違いなかった。

あぁん、みんな私の事を厭らしい目で見ているんだわ・・・。彩花は校内で誰かとすれ違う度に向けられる視線に怯え、心の中で悶えた。授業中などは大勢の生徒達の隠微な眼差しを全身に浴び続ける事になり、彩花はどうしようもなく体を火照らせ、授業が終わるころにはもうフラフラになっていた。

彩花自身、運動会で極限の羞恥地獄を体験してからというもの、理性と感性のバランスが崩れてしまったのか、ふいに運動会のグラウンドを素っ裸で逆立ちしながら大勢のギャラリーの前を歩いた事や、最後に逆立ちしながら潮を吹いた事を思い出しては、教員用のトイレに駆け込みオ○ニーに耽ってしまっていたのだ。私、どうかしてる・・・。彩花は

そう自覚しながらも、体の中で勝手に燃え上がる官能の炎をなかなか消せずにいた。

そんなある晩、彩花の元にクラス委員の智子からまたメールが送られてきた。彩花はいつものようにドキドキしながらメールを開くと、そこには彩花の教員生活に新たな展開をもたらす指令が記されていたのであった。

翌日の放課後、彩花は顧問を務める女子水泳部の部活練習の指導をするために校庭の隅にある屋外プールへと向かっていた。彩花の務める中学校の女子水泳部は、秋から春先にかけての寒い時期は隣接する高等部の室内プールで練習をしていたが、熱くなる時期には中学校の所有する屋外プールで練習をすることになっていた。

学生時代、水泳部で活躍していた彩花は、教師となりこの中学校に赴任してきて三年目となる今年から女子水泳部の顧問を任され、自身も週に一度の割合でプールに顔を出し部

員の指導に当たっていた。ただ、実際に泳ぎ方の指導などをするのは大学生の専属コーチがいたので、彩花は顧問としてジャージ姿でプールサイドに立ち、プールの中で泳ぐ部員達に声を掛ける程度であった。

あの忌まわしき運動会以来、彩花がプールに水泳部の指導に行くのはこの日が初めてだった。部員たちが一体どんな反応を示すのか、あれほどの醜態を大勢のギャラリーの前で晒した自分を果たして顧問として受け入れてくれるのか、彩花は不安で仕方なかったと。校庭の隅にあるプールに近づくにつれて、水泳部の女子生徒達の元気な声が響いてきた。

女子水泳部は、大学生コーチの熱血指導の成果もあり、彩花の務める中学の体育会系の部活の中ではかなり強い方で、部員の女子生徒達も皆、男勝りな気の強い生徒達が多かった。

彩花がプールの入口からプールサイドに入ると、その姿に気付いた一年生部員の数名が

いつもより少し小さな声で「こんにちは！」

とぎこちない挨拶をしてきた。

「こんにちは・・・」

彩花は少し照れくさそうに挨拶を返した後、

そのままプールサイドにあるロッカーの方に

歩いて行ったが、他の部員達はその姿に気付

きながらも、顧問である彩花の事を無視する

かのように誰も挨拶をする者はいなかった。

それは明らかに運動会前とは異なる光景で

あった。普段なら部員達は皆、体育会系らし

く顧問の彩花がプールサイドに現れた時には

大きな声で「こんにちは！」と挨拶をした後、

一礼をするのが慣例になっていた。それは以

前、体育館で行われた身体測定の時に彩花が

全学年の女子生徒達の前で痴態を晒してしま

った後の部活の時でも変わらず、女子水泳部

員達はプールサイドに現れた顧問の彩花に対

してちゃんと礼儀正しく挨拶をしていたのだ

った。

ところが今回は、ほとんどの部員たちがまるで彩花の事などもう眼中にはないと言わんばかりのふてぶてしい態度をとり、運動会で顧問の美人女教師が晒した痴態に、多くの部員たちが憤りを覚えている事を窺わせた。

ジャージ姿の彩花がロッカーの前まで来ると、その様子を遠くから見ていた女子水泳部コーチの栗栖優香は部員達に一斉に号令を掛け、全員をプールサイドに集合させた。

「今日の練習はこれで終わりにします。それで今日は顧問の木元彩花先生の方から女子水泳部のみんなに特別なお話があるそうなので、しっかり聞いてください」

栗栖はプールサイドに座る部員達に告げると、ロッカーの前で恥ずかしそうに佇んでいる彩花に向けて小悪魔のような不敵な笑みを見せ、部員達の元に招いた。

女子水泳部でコーチを務める栗栖優香は、この中学の卒業生でそのまま付属高校へと進

学し、今は有名大学に通う大学二年の女子大生であった。彩花は昨夜送られてきた智子からのメールで初めて知ったのだが、栗栖は今、智子の家庭教師もしているらしかった。彩花は今が今年度から水泳部の顧問になり、大学生コーチの栗栖と出会ってからの数ヶ月間、その事実について彩花は全く知らなかった。驚愕の

自分の近くにいて、いつも明るく接してくれていた栗栖が、自分の弱みを握り支配しようとする首謀者と繋がっていた事実は、彩花にとって受け入れがたい事であった。水泳部コーチの栗栖は、自分に関する情報を一体何処まで智子と共有しているのか、いつもは俄かには受け入れがたい態度で振る舞ってくれていた彼女は、心の中では自分のことをどんな風に思っていたのか、彩花は今目の前で小悪魔のような笑みを浮かべる栗栖を見て、彼女もまた智子と繋がった共犯者の一人である事だけは確信していた。

「それでは木元先生、宜しくお願いします！」

栗栖は力強い言葉を彩花に掛けると、少し離れた場所から彩花の様子を窺った。

プールサイドの飛び込み台のすぐ傍で、ジャージ姿の彩花は三十名ほどの女子水泳部員達に囲まれる形で立っていた。

「今日は、女子水泳部のみんなにまず謝りたい事があります」

彩花は神妙な面持ちで部員達に語り始めた。

それはすべて、昨夜、智子から送られてきたメールに記されていた通りの行動で、彩花がこれから語る話も、智子から指示された内容に他ならなかった。

彩花はふと、部員達の背後に立つコーチの栗栖がスマホを自分の方に向け、何やら動画撮影でもしているのが分かった。おそらく、自分がちゃんと智子の指示通りに行動しているかを、智子にライブ配信しているのだろう。

例えこの場に智子達はいなくても、彼女達は共犯者の栗栖を介して、自分の事をしっかりと監視しているのだ。

そう思うと、彩花には

もはや逃げ場などなく、これから自分が水泳部員達の前で演じなければならない羞恥シーンを想像するだけで、脚はガクガクと震えてしまっていた。

■海老沢薫ＢＬＯＧ

・・・最新作の出版情報や、そのほか各種コンテンツ情報などを配信。

https://ebisawakaoru.blog.2nt.com/

■そのほかＳＮＳ

https://x.com/ebisawa_K

https://www.instagram.com/kaoru_ebisawa/

https://www.pixiv.net/users/70200870

■海老沢薫Ｗｅｂ連載小説

『清楚な美人妻　彩２７歳　絵画モデル編』

https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=9281

『清純派女優　結衣２４歳－国民のペットへと堕ちていくヒロイン－』

https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=18802

『清純派女優　結衣２４歳－女神の憂鬱－』

https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=26675

『女教師　玲奈２５歳－女性教諭の前代未聞の不祥事－』

https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=17186

『美人社長　里帆２６歳－若き女社長のプライドを砕く屈辱の契約－』

https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=18885